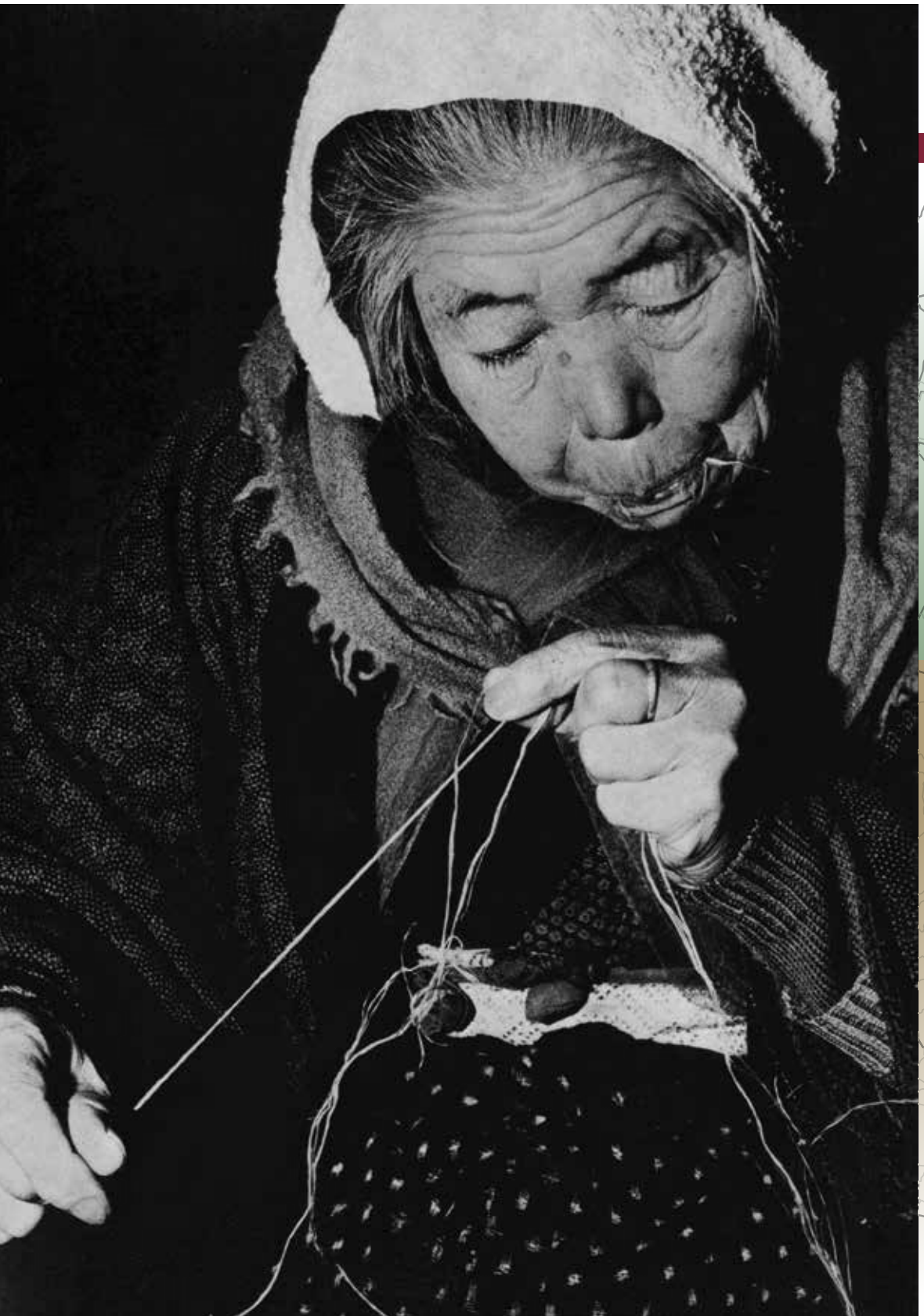
「食と農」の博物館
展示案内 No.70

展示期間■2015.10.14～2016.03.13

東京農業大学「食と農」の博物館
〒158-0098 東京都世田谷区上用賀2-4-28
TEL.03-5477-4033
FAX.03-3439-6528
(URL)http://www.nodai.ac.jp/syokutonou/

開館時間 午前10時～午後5時 (4月～11月)
午前10時～午後4時30分 (12月～3月)
休 館 日 月曜日(月曜が祝日の場合は火曜)・毎月最終火曜日
大学が定めた日(臨時休業がありますのでご注意ください)



女わざと自然とのかかわり
―農を支えた東北の布たち―

開催にあたり

「布たち」・・・布がまるで生き物のように語り掛けてくるかもしれません。岩手県を中心に東北地方に伝承される暮らしのわざを体験するうちに集まってきた布たちを「女わざの会」の方々は、きっと「布は生きている」と信じておられるのではないでしょうか。それは、当時、東北の農家の女性達が、「手わざ」を駆使し、原料・素材から育て、紡いだ糸で織った布、または染めた布でこしらえた、ある意味、自分の子供のような日常着や野良着を捨てられず、何とか残したいという気持ちに寄り添って来られたからだと思います。

堅い樹皮布→硬い麻→出荷できない傷の付いた繭からの絹糸→東北では育ちにくい木綿の流通・・・素材の変遷は有れども、農家の女性達の「布たち」に込めた気持ちは、いつの時代も同じだったのではないでしょうか。機械織りでムラがなく美しい、しかし、多くは画一化された布で作られた現代の洋服からは感じ取れない「生命力」のようなものを、展示された「布たち」からは受け取ることが出来るのではないかと思います。それは、あの東日本大震災を生き抜いて来た「布たち」だからこそ、余計にそう感じられるのではないかと。

実は、この「食と農」の博物館にも東北の「布たち」がおります。普段はバックヤードに仕舞われておりますが、今回の「女わざの会」との共同企画により、同じく本館所蔵の古農具と共に、表舞台に登場することになりました。「布たち」が作られた当時に想いを馳せていただきつつ、併せてご覧ください。

東京農業大学「食と農」の博物館
館長　上原　万里子

平成27年10月14日

表紙写真・佐々木稔（岩手県奥州市）

東北にいきづく「女わざ」

森田　珪子（修紅短期大学名誉教授）

東日本大震災から４年半が過ぎて

21世紀を迎えてはや15年。エネルギーや情報伝達の急激な発展を見る日常生活の中で、東日本大震災をはじめとする地球上各地の災害が気に懸かる時代になりました。折しも今年は戦後70年目という節目にあたります。この度の展覧会では、大正時代から昭和時代の戦前・戦中・戦後を中心にした短い時代に生きていた東北の布たちをとおして、当時の経済恐慌、飢饉、戦争と苦悩を生き抜いた人々の生命の大切さに想いを寄せて戴くことになりました。

東北は縄文時代以来、農民の日常着や農作業着の素材は樹皮布が中心でした。奈良時代に大陸から伝わってきた養蚕は、農家の大切な副業として受け継がれ、出荷出来ない繭からひいた絹糸が自家用の晴着として登場しました。

西日本から明治時代になって木綿が運び込まれると、東北の女性たちにとっては大きな福音となり独特の布文化が生まれたのでした。綿布は麻や樹皮のような硬い素材と違って肌に柔らかく、暖かい。そして、針仕事をする女性にとっては何よりも扱い易い。大正時代に機械で織られた木綿は、化学染料で染められ色彩も鮮やかでした。

雪に閉ざされた長い冬の間の木綿との付き合いは、日常の苦労を忘れる時間でもあったのです。針は鍬や鋤と同じく鉄を含み農具に次ぐ大切な道具のひとつです。家族を守る衣類は勿論、地域の中での行事や冠婚葬祭など、人々との助け合いに欠かせない袋作りなども楽しんでいました。

会場に展示してある布たちは、コレクションと呼ぶべきものではなく、殆どが「どうしても捨てられないから」「私が居なくなったら焼かれてしまう」「人前には出せないものだけど」という女性たちから、土地に伝わる手わざを守ろうとしていた「女わざの会」の活動の場に持ち込まれて来たものです。本展では岩手を中心として、青森・秋田・山形の一部のものを東京農業大学「食と農」の博物館の収蔵品と併せて展示しています。

会場の後半には、農とかかわりの深い祭や芸能装束を関係機関よりお借りして展示しました。最近になって地域の女性たちの手から作られることが困難になり、職人により復元されたものもあります。

写真１　地機に取り組む

この布たちを、手わざを大切にしようという活動の資料として、現代に活きるものづくりの参考にしてきました（**写真1**）。東日本大震災で、この布たちを収納していた建物が全壊してしまいましたが、東京農業大学のご理解、ご支援を頂き、整理・分類して今回の特別展に甦らせることが出来ました。

写真２　『南部つづれ菱刺し模様集』
北の街社発行・1977年

手わざの復権

今から40年も前のことです。ふと立ち寄った青森駅前の小さな書店で１冊の本に出合うことがありました。『南部つづれ菱刺し文様集』（北の街社発行、1977年）という厚さ５cmもある本のカバーに写っている２人の女性の姿（**写真２**）が私をとらえたのです。今まで見たことのなかった民俗に感動し、著者、田中忠三郎氏に葉書を出しました。そして、その後まもなく主宰された「東北・北海道民俗研究会」に夫と２人で参加させて頂いたのでした。年１回東北各地で開かれた研究会には、町の若い青年や友人を誘っては、泊りがけで出かけました。「文明は自然の一部である人間の手わざを忘れてはいないだろうか。」酒を酌み交わしての夜の語らいは遅くまで続きました。当時、東北各地に造られた民俗資料館には、使わなくなった農具、汁器、織機、農作着等のモノだけが所狭しと並べられていたのです。

丁度その頃、私が暮らす岩手県前沢町（現・奥州市）の隣りの衣川村（現・奥州市衣川区）が国道４号線近くに国民宿舎を建てて、その敷地内に中規模の茅葺き屋根の民家が村の奥から移築され、土間には農具や織機などが並べられていました。「どうやら村のレストランになるらしい」という噂を耳にした夫と私は村役場に出向き「村に伝わる様々な手わざの伝承の場」という企画を進言しました。翌年その企画は村の社会教育の一環として取り上げられ、民家の門口には「衣川民芸屋敷」という木彫りの看板が掲げられました。そして、衣・食・住はもとより、芸能・民謡・民話と村人を中心にして民俗の伝承活動が繰り広げられたのでした。

冊子への記録

千葉県の漁村出身の私が、10年間ほど暮らした東京で出会った夫の故郷の岩手県南の平泉の隣町、前沢に移り住んで、今年は48年目になります。夫の両親と暮らしながら子供を育てるうちに、体験したことのない東北独自の生活文化に触れることが出来たのは当然のことながら、しかしそれは、風前の灯ともいえるものでした。

東北新幹線はまだ走っていませんでしたが電気製品の一般家庭への普及は目覚ましく、テレビ、冷蔵庫、洗濯機が次々に使われ始めましたが、台所には水道がまだひかれていませんでした。福島原子力発電所は建設が始まったばかりでした。急激に電気使用量が増えたのです。そしてあっという間に、同じ屋根の下にいる何世代もの暮らしが別々になり始めていました。

経済成長という名目のもと「消費は美徳」という言葉に乗って、衣食住をすべて金銭だけに頼って良いものだろうか。子育て中の母親の会話には、昔なつかしいこの土地の暮らしが登場したのでした。大人がものを作る姿を子供に見せることが大切なのではないだろうか。その話し合いが「衣川民芸屋敷」の活動につながっていきました。手わざに性別はないのですが、まず女性の手わざからということで「女わざ」という言葉が生まれました。そして活動の一部が年１冊の冊子（**写真３**）に記録されていきました。何世代もの人々が家族として同じ屋根の下に住んでいる農村社会でも、多様化した暮らしの中では、姿だけでは伝え難いのではないだろうか。文字化することで少しでもその土地の文化を生きながらえさせることが出来るのではないかと考えたのです。

冊子は、世代間のタテのつながりばかりではなく、各地域のヨコのつながりも作ってくれました。活動に賛同して下さる方々との交流は絶えることなく続いています。

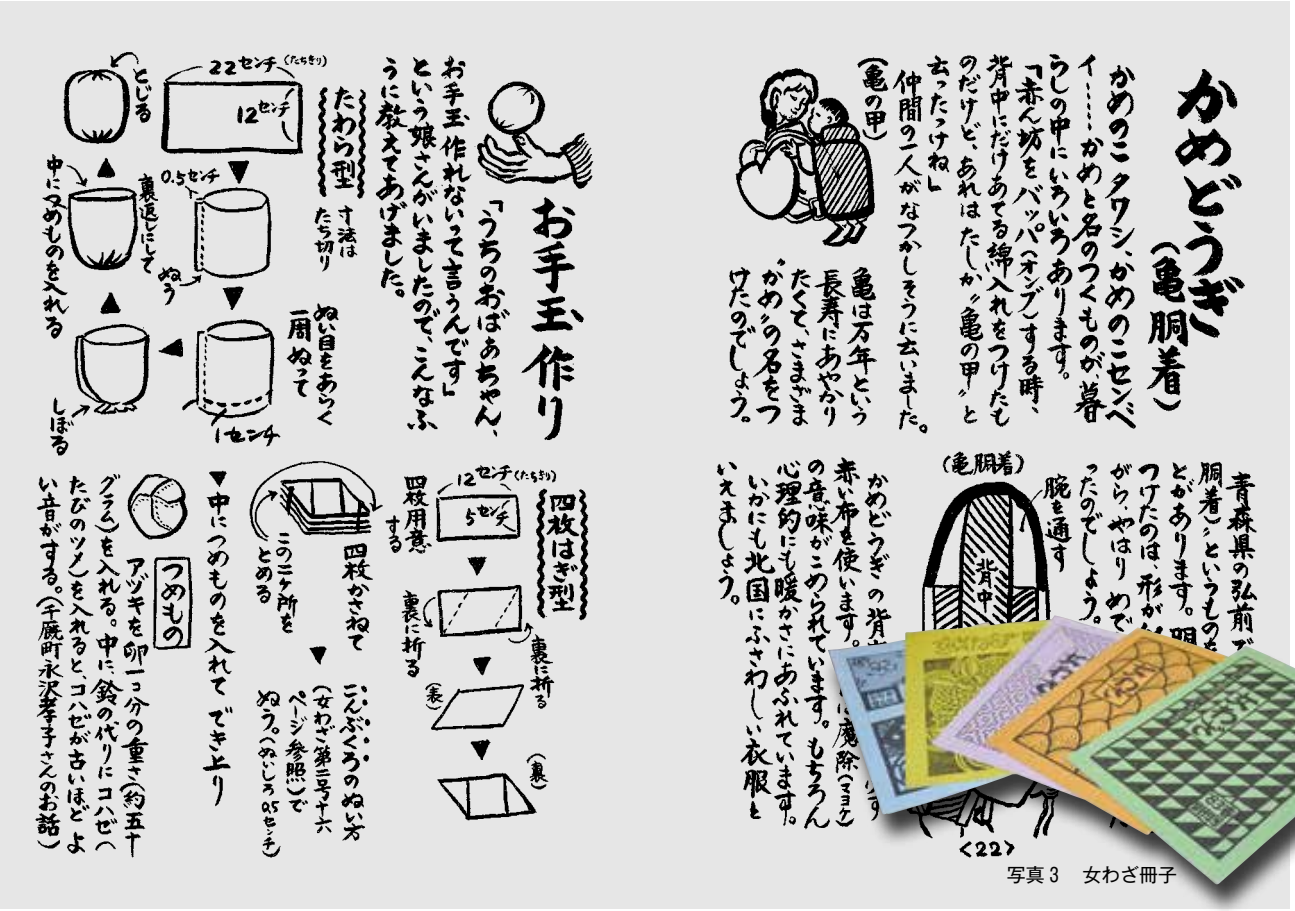


写真３　女わざ冊子

「ヅブコ」への思い

本展の準備をするうえで、撮影に協力して頂いた男性から思いがけない言葉を耳にしました。次々セットされる布たちを見るや「やあ、やあ、久しぶりだなあ、おら（自分）ヅブコ見っと母ちゃん思い出すよ」と目を細めながら懐かしそうにいうのです。言葉の音（おん）だけでは文字にして「ズ」なのか「ヅ」なのか迷います。「ズブコ」なのか「ヅブコ」なのか。継ぎはぎをした農作業着そのもののなのか、それとも穴の開きそうな布地の裏から別の布を重ねては縫いつけるシキシツギといわれる小さな布のことなのでしょうか。方言の音（おん）には長い間、その地域で暮らす人々の心が沢山詰まっていて文字に表しにくいものです。手がかりに『明解国語辞典』（金田一京助監修）を引くことにしました。「ズブ」は造語で「全くの」という意味なのでピンときません。「ヅブ」は出ていませんが「ツブ」は漢字で粒と書いて「①穀物の種、②まるくて小さなもの」と説明されていました。「そうだツブにちがいない」と思ったのは、昔話に登場する「つぶこ嫁御」や「つぶこ太郎」が浮かんできたからです。生まれたばかりの時は小さくて、誰にも相手にされなかったけれど、やがて大きくなって家族をしっかり支えたり、世の中のためになることをする人物の話です。それは小さな種がやがて大きな作物に実り人々の役に立つ、農業そのものへの願いにも通じます。

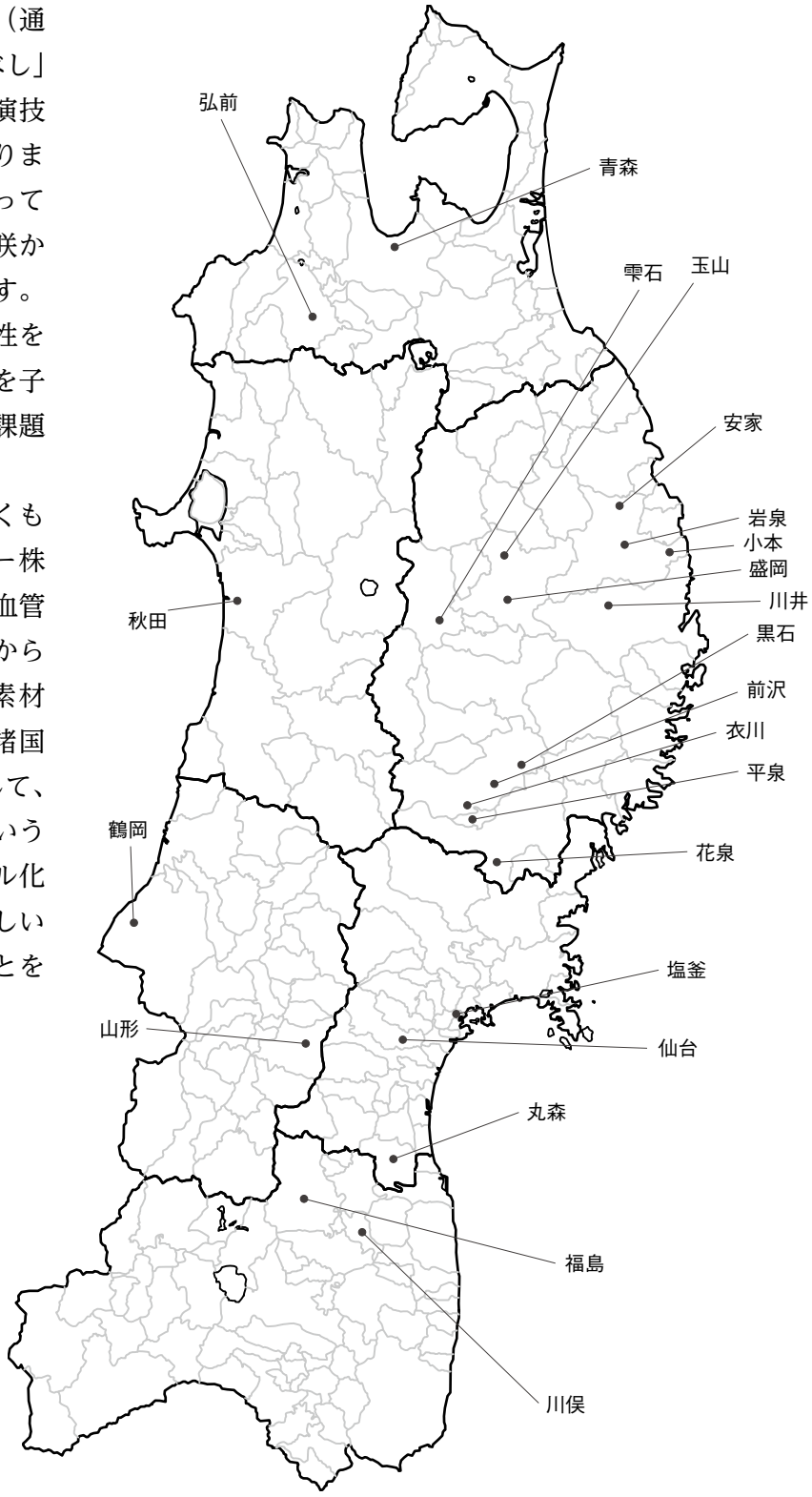
60年前には、ヅブコと母親の姿は農家でなくとも、家族にしか見えない日常の風景の中で、人々の生命を支えていたのでした。種というものは、どれも小さいけれど、手入れを怠らずにひたすら努力すれば成長し、そして実りの時を迎えます。刈りとられた稲束を一本の杭にねじりながら積んで行う乾燥を岩手県南地方では「ホンニョ」といい、**写真 4** のホンニョはねじりホンニョとも呼び、今にも動き出しそうで、農民の姿を彷彿させてくれます。かつて東北を訪れたギリシャ人は、この風景を目のあたりにして感動の声をあげたと聞いたことがあります。

写真 4　岩手県南地方の「ねじりホンニョ」（写真　藤原克夫）

花は心、種は態

「女わざ」のわざを漢字に置き換えると「技」や「業」の他に、「態」もあります。室町時代、貴族や武家の芸術に農民の芸能を取り入れ日本独自の「能楽」を創始した世阿弥の著書『風姿花伝』（通称「花伝書」）の中には「花は心、種は態なるべし」とあります。ここでいう「態」は能舞台での演技そのものを指していることはいうまでもありません。生きる上でどんなにつらいことがあっても、生きていてよかったと思う喜びの花を咲かせることには手わざという種が必要なのです。そのためには自然条件の異なった風土の特性を生かしたもの作りに精を出す大人たちの姿を子どもたちに見せ、体験させることが緊急の課題といえるのではないでしょうか。

今や繊維業界の技術開発はめざましく、くもの糸を再現した「QMONOS®（クモノス）」（スパイバー株式会社）が山形に登場し、自動車部品や人工血管への活用が期待されています。又、縄文時代から終戦の年まで、東北では特に主要な自然素材だったヘンプ（大麻）が、今アメリカやEU諸国では薬品、食糧、燃料、そして土壌改良材として、地球環境保全の立場から見直されているということも報告されています。産業のグローバル化と共に第２の産業革命の到来といわれる新しい時代に、この特別展がわずかでも役立つことを願いながら、皆様に感謝いたします。



本誌で紹介されている東北地方の地域名

母たちの布に学ぶ

吉田　信子（結工房主宰）

宮城と岩手

2004年「女わざの会」主催の『いのち蘇る布細工展』で、宮城県南部の丸森町からいらした田所キクノさんと出会ったことが、私の糸づくりの始まりでした。糸からの制作をしたいという20年来の願いが叶い、さっそく次の日から田所さんのもとに通いました。

田所さんは、保健婦として長らく地域に貢献されていましたが、定年後に福島県川俣で織りと染めを習い、「高齢者センター織物部会」の設立に尽力された方です。機（はた）を織ろうと思ったのは、母親が繭から糸を取り反物を織り上げて家計を支えていた姿を見て育ったからだと言います。

丸森町は、養蚕の先進地であった福島県伊達郡の隣に位置し、江戸時代から養蚕の盛んな地でした。今も10数軒の養蚕農家があり、群馬の製糸工場に繭を出荷しています。また東北地方独自の奥州座繰りや繭綿からの糸つむぎ、複雑な組織織りの技術も残っており、昔はどの家にもあったという福島から伝わったと思われる高機（**写真１**）が、今も数多く見られます。

東北南部のシルク地帯しか知らなかった私にとって、「女わざの会」に集まってきた岩手の布たちはまったく未知の領域でした。展示しきれないほど沢山の野良着、敷き布がありました。刺し子やシキシツギで、少しでも暖かく、少しでも長く着られるように工夫され、長く実用に耐えてきた布たちの、その背景が知りたいと思いました。

まず岩手には、丸森では見ることのなかった地機（じばた）（**写真２**）が多いことに驚きました。特に北上山地の川井村（現宮古市）の北上山地民俗資料館には、様々な形の地機が数多く残っており、深くこの地に根付いていたことを感じさせます。一方、高機は少なく、養蚕と共に入ってきたと考えられる福島と同じタイプものでした。

福島タイプの高機は別名「絹機」あるいは「長機」と言い、絹の細い繰糸を使い、経糸（たていと）の密度の高いものを織ります。平織り以外にも複雑な織り方が出来る機です。地機は、麻などの植物繊維や、綿・絹などの紡ぎ糸を使い、太めの経糸で密度の低いものを織る、もっぱら平織り専門の機です。必要とあれば地機で絹も織ったでしょうが、かなり頑張らなくてはなりません。一方高機で麻を織ることは容易ですが、現金収入になるものを効率良く織るための機です。機が違うということは織られていたものが違う、そしてその背景となる歴史が違うということなのです。

麻の時代

古代から木綿が普及するまでは、自家用布は全国的に麻・マダ（しな）・イラクサなどの植物繊維から作られていました。暖かい地方では江戸時代には木綿が普及しましたが、北東北では寒冷なため綿が育たず、明治中期まで布といえば大麻布を指すほど、野良着から敷き布まで布のほとんどが麻の暮らしでした（**写真３**）。

大麻は屋敷近くの苧坪（おつぼ）と呼ばれる麻畑で、自家用に使う分だけ栽培されました。春に種を蒔

写真１　高機
経糸も綜絖も機にセットできるようになっている。
人はイスに座りペダルを踏んで織る。

写真２　地機
経糸を腰にくくりつけて張り、足首に綜絖を結び糸を上下させる。
人が機の一部になって織る。

写真３　大麻布の長着
H131.5×W121

き夏に収穫し、干して納屋に保存して置きます（**写真４**）。稲刈りが終わると、皮の表皮を掻き取って内部の繊維を取り出し、秋から冬にかけての夜なべ仕事で糸を作り溜め、春先に機を織り、衣服を縫いました。田植えは、新しい衣服のお披露目の場でもあり、皆で腕を競い合ったといいます。

写真４　大麻（右）と苧麻（左）の原料と糸

農閑期の半年間に、自分の家族分の衣服を新調したのですが、その仕事量の多さと、それに比例した仕事の速さには驚かされます。また農繁期には、女性たちは１人前の農作業をこなし、さらに家事・育児をした上に、夜なべ仕事で衣服の繕いや縫い直しをしました。

１年中衣類に係わる仕事が尽きることはなく、製作から洗濯まで、家族の衣服全般を自分の責任において執り行うことが主婦の役割でした。その役割の名前を「センダク」（注１）といいました。

糸を作り、布を織るという作業は、私にとっては修行のようでもあり、ことさら意識しなくても祈りのようなものが入り込んでしまいます。それが家族のものであれば尚のこと、家族の身を案じ幸せを願う心が織り込まれたことでしょう。「センダク」は大変な仕事量でありますが、責任ある重要な仕事として誇りを持って行なわれていたと思われます。随所に見られる工夫や丁寧な仕事ぶりに、母たちの気概が感じられます。

綿への移行

木綿は、古着または着物を布に戻した解分（ときわけ）、総括して古手（ふるで）と呼ばれる京阪地方からの移入物が一般的で、肌着や裏地として使う程度でしたが、江戸中期から綿（わた）として入り始めました。正月や祭りに着る特別な「晴れ着」として木綿が定着し人気が出ると、すのまき（篠巻き）綿という、25～30センチの細い竹（篠）に繰綿を巻きつけ竹を抜き筒状にした綿を、束にして売りに来るようになりました。

それを紡いで糸にするのですが、すでに麻糸に撚りをかけるときに使っていた糸車で行えるせいか、「紡ぐ」という新しい技術になんの躊躇も感じられません。紡いだ糸を藍染めする紺屋（こうや）が各地にできたほど一般的に行なわれたのでした。一方で麻は変わらずに自家用布の主流だったので、麻と綿の両方を糸作りから行なっていた家も多かったと思われます（**写真５**）。

明治時代に機械で紡績され、化学染料で染められた「唐糸（とういと）」（木綿）が移入されるようになりました。細手の糸で弱かったのですが、色が豊富で美しい縞柄が容易に織れ、さらに安価だったので、瞬く間に普及しました（**写真６**）。すのまき綿を扱っていた綿屋も、染めていた紺屋も潰れ、風合いの良い手紡ぎの糸で織った丈夫な手織り木綿は、急速に影をひそめてしまいました。さら

に、自家用布の主流は麻からも離れ、次第に織るだけで良い機械紡績の木綿へと移っていったのです。

絹の参入

綿の糸紡ぎはされなくなってしまいましたが、それに代わるように養蚕が盛んになり、出荷できない汚れ繭などを自家用に使って、絹の座繰りや糸つむぎが行なわれるようになりました(注2)。絹は長繊維なので、麻や綿などで鍛えられた女性たちにとっては、非常に容易で早く糸になる画期的な素材であったろうと思われます。

丸森では座繰りした後、精練(せいれん)(注3)しないで販売用に白生地を織っていました。絹糸の撚糸(ねんし)(注3)は細いだけに相当の手間と時間がかかりますが、精練しなければ無撚(むねん)で織れたそうです。

本展の資料である岩泉で作られた二部式着物は、経(たて)・緯糸(よこいと)ともに「たなぐり糸」ということでした。その表現は初めて聞くものでしたが、非常に繊度(せんど)むらのある荒い座繰り糸で、撚糸・精練ともにされていて、苦労しながらも丁寧に作られたものです(**写真7**)。

また宮古市北上山地民俗資料館には経が絹の繰糸、緯は麻糸の白生地がありました。これは撚糸・精練ともにされていませんが、非常に手馴れた綺麗な仕事ぶりでした。

写真6　唐糸で織られた綿布

写真5　手紡ぎ・藍染めした糸で織った厚手の綿シャツ

写真７　たなぐり糸の布

自給自足の生活のなかで、女性たちは様々な素材を自由に使いこなし、用途に合った衣服を作り上げてきました。この何千年もかけて培われてきた、広範囲にわたる知識と技術力の高さは、絹の糸作りだけでも悪戦苦闘している私の想像をはるかに超えていました。

既製服の時代

昭和に入って現金収入を得られるようになると、衣服を購入する機会が増え、次第に布を製作することは減ってしまいましたが、岩手で最後まで残ったのは、一番古くから織られてきた麻（大麻）でした。麻は水についたところしか濡れないので田んぼに入るには具合が良く、摩擦にも強いので農民には大変重宝なものだったからです。1965（昭和40）年頃まで岩手の農村部では、かつて日本の自家用の衣服を支えてきた麻の世界が、細々とではありますが、まだ残っていたのです。（**写真８**）

1964年の東京オリンピックを挟んだ約20年間の高度経済成長期に、大量生産の既製服が作られ、ついに衣服は手軽に買うものとなり、母たちの「センダク」は終焉を迎えたのです。各家にあった機や糸取りの道具は、納屋の奥深くに仕舞われ、その後も順次取り壊され燃されて姿を消してしまました。それと同時に古代から連綿と受継がれ、蓄積されてきた布を作る技術も、このたった50年の間にほとんど忘れ去られてしまったのです。

自家用布に学ぶ

流通や経済を優先することで、わたしたちは沢山の良いものを失ってしまいました。絹糸の場合、貯蔵に便利なように高温で繭を乾燥させることで、糸の表面を傷つけてしまいます。また効率を優先して高速で糸を繰（く）ることで、絹の持つ本来の伸縮性が失われてしまいます。均一で節のない糸が良い糸とされますが、それは機械で織る場合を想定した話で、手織りの場合の良い糸ではありません。自分で作った健全で手の感触の残る糸を使うと、もう市販の糸は使いたくなくなりました。レトルト食品と家で作るごはんのように、何かが歴然と違ったのです。

母たちの作る衣服は、原料を育てるところからから始めるのですから、当然農薬など使わず、素材から質の良いものでした。自らの手で糸に

写真８　岩手県雫石地方の田植え姿の女性たち。

し、天然染料で染め、余計な物の一切入らない健全な布を織り上げたのです。現代では手に入りにくい、完全に安心な衣服です。

きわめて質の良い手作りの衣服を、数少ないので毎日のように着て、繕(つくろ)いながら糸くずになるまで大切にする生活。それが50年前までの日本では、どこでも見られる風景でした。今の時代にあっては間違いなく贅沢な衣服といえるでしょう。

現代のわたしたちは、出来合いの衣服を購入し、大量に持つことで満たされようとしていますが、次々と買っては捨て去り、また新しい服を求めるのは何か満たされない思いがあるのではないでしょうか。母たちの布には、現代のわたしたちの衣服生活を豊かにするヒントがたくさん隠されていると、私は考えています。

注1 センダク　東北地方で一般には衣服のことをさすが、オシラ様や地蔵に着せる布も「オセンダク」と言った。青森県五戸地方では「センダク渡し」が行なわれていた。嫁入り後も夫の世話は姑が一切行ない、３年が経つと姑から夫の衣装その他一式が渡され、「これからはお前が何でもする様に」と申し渡されたという。『日本民俗大辞典』より

注2 絹の座繰り　絹は撚り合わせて糸にする「つむぐ」という方法の他に、繭１個から１本ずつ蚕の吐いた糸をほぐすように引き出し（**写真９**）何粒分も合わせて糸にする座繰りという方法がある。

注3 精練(せいれん)　絹繊維の不純物を除去すること。絹の場合、シルク繊維の周りをコーティングしている膠(にかわ)質のセリシンを灰汁や重曹などで煮て除去することをいう。精練することで、柔らかく艶のある絹となる。

注4 撚糸(ねんし)　生糸に撚(よ)り掛けを行なう作業、又は撚り上げた糸をいう。撚るとは一方向に捻ること。生糸の場合、沢山の繭から１本ずつ出ている糸を引き揃えているだけなので、撚りを施さないと、すぐに糸が割れて真綿のようになる。

写真９　絹の座繰り

岩泉地方の自然と紫根染

中屋　洋子（元岩手大学非常勤講師）

岩泉地方は岩手県北上山地の北東部から北部三陸海岸につながる本州一広い町で、シンボル宇霊羅山を始め、急峻な山々に囲まれ、面積の93％が森林に覆われています。町を流れる清水川、小本川、大川、安家川、摂待川等（**写真１**）のゆたかな水、そして、龍泉洞、安家洞を初めとする太古の息吹を伝える石灰岩層、さらに、2013年（平成25）に岩手県沿岸を中心として認定された南北海岸線300kmにもおよぶ日本最大の「三陸ジオパーク」が、この地域の自然の特徴をあらわしています。東日本大震災からの復興を目指して歩み始めている今、厳しいけれど、悠久の自然の営みと、そこに生きる人たちの熱い情熱を感じさせる町です。

写真１　岩泉町内を流れる川

岩泉地方の農家の環境と暮らし

東北地方の中でも、山がちで平野地が少ない立地条件の当地方では、水稲主体の社会体制でも、畑作が主で水田はごくわずかでした。さらに旱魃（かんばつ）や長雨の影響で、しばしば凶作にみまわれました。このような中でも、人々は互いに協力しあい、自然の恵みを活用し、暮らしを営んできました。その努力と知恵は今でも生かされ、受けつがれ、語りつがれています。

岩泉地方の衣生活　――麻・木綿の調達

『岩泉地方史』（岩泉町教育委員会、1980年）には、「古くから明治にかけ、反物や既製衣服を商う店は岩泉地方にはなかった。従って衣服の生（き）地（じ）から仕上げまで自給自足しなければならない」とあります。かつての岩泉町は宿場町として賑わっていたようですが、大部分のところは、地方史にあるとおりだったのでしょう。農民の衣服である麻は、各家で栽培からはじめて衣類に仕立てることは、他の地方と同じでした。機織と裁縫、家族のための衣類作りは「女の仕事、女の役目」だったのです。

さらに「『機具足（はたぐそく）』には『長機道具』と『平機道具』の二種あって、長機織機では木綿反物をつくる、平機織機は主に麻布反物をつくる…」とあります。麻だけでなく木綿も織られていたことがわかります。さらに、藍草を栽培し、藍玉を作っておいて、自家染をしたとも記されています。こうして染め上げた布や白いままの布は自家用にするほか、「呉服屋で木綿の反物と交換した。値段は麻布の方が大分高価だった」とのことです。当時の岩泉地方では麻や木綿が地織りされ、自家用だけでなく、商品として暮らしを助けていたことが読みとれます。

ただ、庶民にとって欠かすことのできない木綿は岩泉地方に限らず、東北地方ではほとんど栽培できません。木綿の綿を買って紡いで糸にして、織り上げるか、あるいは他から運ばれてくる反物を買ったり、あるいは古手（ふるて）を買って日常着に当てなければなりませんでした。

自然を生かす

衣類、帽子・ミノ・ハバキ・腰当など付属品、背負い袋、縄、籠などの原材料のほとんどは栽培するアサのほかアイコ、チョマ、マダ、ブドウ、フジ、カバ、ガマ、カヤ、タケ、クワなど自生植物でした。そして使う人の手で使い勝手を工夫しながら作り出されました。こうした中に葉、根、茎、樹皮などを染料として用いる植物があります。使われた植物は藍草（栽培）、キハダ（内皮）、クルミ（果皮、樹皮、枝葉）、柿渋、シクロ、ツツジ（根）、クッツオ、エエコ（アイコ）、カシラキ、そしてムラサキ（根）などです。

写真２　紫根染・きはだ染絹糸

岩泉に根づいた紫根染

岩泉地方は、古くから、その根が紫根染(**写真２**)の染料となるムラサキの産地でした。もともと南部地方(現在の岩手県、秋田県、青森県にまたがる地域)のムラサキの根(紫根)が良質であることは国内でも有名でした。岩泉地方も生育に適した自然環境で、自生の山紫根が採れ、珍重されてきました。岩泉町で早くから醸造業を営む八重樫家(現当主：義一郎氏)では、家業のかたわら代々の当主夫人や娘たちによって、この紫根をもちいた紫根染が行われてきました。その技法の特徴は糸を染めてから織り出すところで、ムラサキ以外にもさまざまな地元の植物で染められた糸を組み合わせたり、織り模様を工夫した上等な織物でしたが、あくまで自家用、あるいは進物用でした。用いられる繊維は、絹、カラムシなど自家のものや地元産のものでした。

その代々の夫人のわざを受けつぎ、さらに後世に伝える役目を果たしたとして、７代目当主夫人フジ氏と、当主姉フキ氏は1952年(昭和27)、岩手県指定無形文化財保持者に指定されました。２人とも故人となりましたが、８代目当主夫人の惠子氏はフジ氏から1977～78年に渡って全工程を伝受されました。また、惠子氏と共にフジ氏の娘早川京子氏(故人)、フジ氏の妹佐々木復子氏は長年フジ氏のかたわらで染色を学び、協力してきました。1988年(昭和63)この３人を指導し、八重樫家の紫根染を成し遂げたのを見届け、フジ氏は半年後にこの世を去っております。享年90歳でした。

染色の工程は映像や文書、布見本等に記録されているので、関心のある人は追跡して見てください。しかし、染料となる、この地方に自生するムラサキは岩泉町教育委員会によると、2006年７月岩手県レッドデータリストのＡランクになりました。

受け継ぎ伝えるわざ

八重樫家代々の夫人たちが担った、伝来の紫根染は「変化する時代の中で、どう伝えるか」という選択の歴史であったように思います。特に６代目夫人のリウ氏(1867年生まれ)の決断は重要だったと思います。幕末から明治～大正～昭和を生きた彼女はさまざまな選択を迫られたに違いありません。1856年イギリスのパーキンが実験中たまたま、モーブ(紫色)を生成したことによって合成染料が開発され、染粉でいつでもどこでも染色ができるようになりました。しかし、リウ氏はこれまでどおりの紫根の染色を続けることを選択したと聞きました。さらに、関心を持って訪れる人たちには、染色法を公開し伝えました。「自家用の染色」という立場ならではの決断だと思います。やがて自然環境の変化から自生ムラサキが激減し、入手が困難になりました。その中でもフジ氏は、フキ氏と共にわざの伝承に尽くしています。伝承のわざをどう守り伝えるかは、今や時代全体で選択する問いでもあると思います。

写真３　安家紫根染ためし染絹糸見本

もうひとつの紫根染

私は、2007年、長年民話や民俗の採集を続けてきた岩泉在住の高橋貞子著の『安家（あっか）紫根染―もうひとつの紫根染の記録』（熊谷印刷出版部）という聞き書きの本に出会いました。実際に岩泉町安家の紫根染を見聞きしたのは、1913年（大正２）生まれと1918年（大正７）生まれの男性でした。そのなかにこれまで紹介されてきた染色方法とは全くちがう、紫根を小麦麹で発酵させた液で染める方法がありました。農繁期の終わった秋から冬に向かって作った染め液は、次の春が来るまで保存できるというのです。日常生活のかたわらで行われる紫根染、もちろん液の状態や染めの管理には細心の気配りが必要です。私は、このような民俗調査の記述をてがかりに、染めてみました。ここでは紫根染は草木染と見られているようです。その糸見本（**写真３**）を紹介します。ただし繊維も紫根も現在入手できる購入品です。結果は満足いくものではありませんが、雰囲気を感じていただければ嬉しいです。

写真４　ムラサキの草・根

写真５　紫根染絹糸・真綿・木綿のハンカチ
砕いた紫根・染めカス

伝わる

ここに佐々木復子氏の孫娘（当時10歳）が夏休みの研究で紫根染を祖母と一緒に体験した記録があります。1985年ころでしょうか。たまたま手に入ったムラサキに「おばあちゃんが大喜びで染め物をしたのでおてつだいをした」、さらに「根をすり鉢でつぶした。袋に入れてお湯を入れた（**写真４**）。濃い紫色がでた。洗面器に糸を入れてそれを浸した。また根をつぶして袋に入れてお湯をかけて糸を浸した。しばらくして糸を引き上げたら、きれいな紫色になった。水洗いをして軒下に干した。乾いた糸は薄い紫色だった。おばあちゃんがずっと前に『あく（灰汁）』とか『ご（豆）』をかけてしまっておいた糸は紫色に染まった（**写真５**）。わたしのハンカチはほんの少しだけ紫色に染まった」。きっとこの体験は少女の心にしっかりと焼き付けられたに違いありません。こころをこめて伝えれば、それを受け止めた人によって次の時代に伝わることを願います。

主な展示資料

1 おくるみ

近所のおばあさんはひと頃、手押し車に風呂敷をのせては私のところによくやってきました。「縫いものが大好きで大好きで」と包みの中からおむつやおくるみ、子ども用の浴衣などを取り出し、「押し入れにしまっておいても捨てられてしまうから、ここさ置いてけらい」そう言って私に手渡してくれました。このおくるみは男児と女児のネル地を継ぎ合せ、かけ布団の古い裏地で裏打ちしています。男の子が生まれても女の子が生まれてもいいようにデザインしたのでしょう。昭和初期頃は赤子が生まれるとこのおくるみでくるんでおき、その間に袖のついた一つ身の着物を縫い上げたものだと聞きました。お産は必ず成功するとは限らなかったのですね。

2 ねじりこんぶくろ

こんぶくろという言葉は米や豆などを運搬するところからついたのでしょうか。穀物の運搬は、祭事や地域の人々とのつながり合いに大切な役割を果たしていました。東北では大正時代になって西日本から木綿の古着が運び込まれると、女性たちは競って美しいこんぶくろを作りました。色調は青・赤・黄・白・黒という5色を基調として鮮やかです。岩手県南地方では、ねじりこんぶくろといって、布をななめに接ぎ合せます。そうすると、バイヤス地は伸びるので、袋の中に沢山入るし、形もゆったり見えます。結婚式では嫁ぐ女性が自分の手で作ったこんぶくろに米を一升入れて、嫁ぎ先の姑に土産として差し出しました。葬式では死者にこの袋に米を一升入れて供え、又新しい一生をと祈ったということです。

3 雑巾

姑が亡くなったあとしばらくして天井裏からダンボール箱にぎっしり詰め込まれた雑巾が出てきました。100枚以上はあったでしょうか。そのどれもが一針一針布に針を刺す運針という最も単純な方法です。着古した木綿の浴衣、着物、ネル、タオル、メリヤスと外側の布は様々ですが、用途がそれぞれわかれています。内側には様々な小さな布きれがつなぎ合わされたり、重ねられたりしています。布の種類といい、使い方といい、まさに雑な（いろいろな）面があるから雑巾なのだと気づかされます。

4 花刺し

老人ホームに叔母を訪ねた時、若い看護士さんが手にしていた台布巾が私の目の中に飛び込んできました。叔母が時折ベッドの上でたのしんでいた台布巾だったのです。彼女の女学校時代に覚えたという雛型を枕の下から出して私の掌にのせてくれました。「これ、あんだにあずける」そう言って別れました。

花刺しは山形県では盛んに行われ、一般家庭の中に見事に開花した技法ですが、岩手では一部の人たちだけに伝わり、やがて青森の南部菱刺しの中に地刺しという呼び方で登場しています。

5 マヤテ

玉山という地域にある農家を訪ねたことがありました。そこで見せて頂いた野良着と前垂れはマヤテと呼び、麻布と木綿をつぎあわせた独特の形をしていました。あとで知ったのですが研究者の調査対象の１つになっていて、現在、岩手県指定文化財として県立博物館のガラスケースの中に展示されています。

三巾前垂れは全国各地で見られますが、マヤテは麻布と絣木綿と２種類の布地を使い、麻布には地域独自の模様が型染され、その上に綿糸で色鮮やかに様々な花が刺繍されています。特に裾にはわりぬいと呼ぶ日本刺繍の原型というべき手法がほどこされています。わりぬいは山辺知行氏がかつて遠山美術館での講演で話されたことがあり、現在の日本刺繍以前の技法ということでした。展示品はこの時頂いた麻布を使って、短大生の卒業研究として復元したものです。

6 かまばたおり

平泉中尊寺に近い親戚のお母さんが、初めて会った私にひとまきの布を手渡してくれたことがありました。「おばあさんが織ったかまばたおりだども足拭きにでもしてけらい」と。

４～５種類の古い木綿の布を裂いて織った横縞の布は、東京では博物館のガラスケースの中で手も触れられず見た裂織の布でした。この家では毎年こたつ掛けに新しく織っていたのですがもうこんな布は古臭いという時代に入っていたのでした。平泉周辺地域の年配者は裂織のことを「かまばたおり」といいます。その語源は未だに解明されていないのですが気に懸かります。正倉院裂の中には綺と書いて「かんはた」と呼ぶ太い絹糸で織った細帯が残されています。この時頂いた布は心なしかこのかんはたにデザインが似ています。

平泉に浄土を作り上げた藤原一族とこの土地で暮らす農民の接点をかまばたという言葉に見る思いがしてくるのです。

7 うづしき

東北の小さな町で生まれ育った友人が或る日「めずらしいものがあるので」と１枚の敷物を見せてくれました。この地方ではうづしきと呼ぶのですが、おそらく打敷という言葉からきているのではないでしょうか。８月の孟欄盆会の仏壇の前にしつらえた盆棚の上にこれを敷き、その上に野菜などの供物をのせるのです。

このうづしきの作者は町の裁縫塾をしながら農家の娘さんに和裁を教えていた先生で、その合間に残り裂でこれを作り、お世話になった方に贈っていたそうです。農村では晴れ着にしか作れない絹の小さな裂を重ね、そのまわりは黒い繻子（しゅす）の額縁でつなげ全体をまとめています。

友人に頼んでこのうづしきを大切にしている方からお借りして、短大生が卒業研究として復元したものです。

8 毛越寺延年舞装束・田楽舞

2011年、世界遺産に指定された平泉の中尊寺・毛越寺には、平安中期に盛んだった延年舞という芸能が一山の僧侶たちの手で伝承されています。この装束は毛越寺延年舞の演目のひとつである田楽舞の装束で、栗で染めた麻布で仕立てられています。毎年大寒にあたる１月20日に行われる二十日夜祭と呼ぶ夜祭の９時から夜半まで毛越寺庭園の常行堂で上演されます。この装束は平安時代の水干という装束を復元して現在では職人の手になるものです。

9 川西大念仏剣舞装束

中尊寺北隣りの衣川区川西に伝わる、剣舞としては最も古いといわれる芸能です。前九年・後三年の役で無念の死をとげた老若男女の亡霊を鎮めるために、お釈迦様が１匹の猿となってあらわれ浄土に導いたといういわれがあります。装束は羽織、半臂、肩当て、袴、帯、手甲、脚絆、そして腰の後部にはおくつ、ぬぎだれという装飾布がさがっています。それぞれの部分の材質は、今では木綿ですが戦前までは麻だったということです。それぞれの部分は、貴族や武士や農民の服装を様式化しています。また剣といっしょに離さず持っている赤い布に包まれたアヤ棒は舞い終えるときに剣と共に投げ捨てられます。アヤ棒といえば機織りにはなくてはならないもの。改めて人間の生命(いのち)と布の大切さを考えさせられます。アヤ棒は様々な芸能の中にも登場しています。

10 蘇民袋

東北の祭のひとつである蘇民祭のハイライトに登場するのが蘇民袋で、この袋は奥州市黒石寺の蘇民袋を復元したものです。つい30年前までは寺周辺の家々の女性たちの手で1日だけかけて織られた麻布が登場していましたが、今では職人の手による麻布を使わざるを得ない状態です。この袋は祭の進行と共に明け方まで厄年の男たちにより水辺に運ばれ、袋の中のお守りと麻の糸きれは各家々に持ち帰られ、豊作祈願を込めて神棚に供えられるのです。

11 紫根染の羽織

岩泉産の諸紬（もろつむぎ）（経緯絹の紬糸）を紫根染した女物の羽織は、大正末期の作といわれています。90年経った今も、黒味を帯びるほど深い紫色と、経緯共、手紬糸でありながら、ふっくらした風合いを保っています。この羽織には両袖に家紋を染め抜いた手織手染めの裏地が用いられており、大切にされて、ゆかりの女性達に受け継がれてきたことがしのばれます。

中世から岩手・南部地方の主要産物であった紫根（ムラサキという植物の根）は、生薬として用いられると共に、紫色を染める代表的な染料植物でもありました。1794年（寛政６）以降には、南部藩（のちに盛岡藩と改称）から幕府へ献上されることにもなり、一般の売買は禁止され、染色も許されませんでした。しかし豊富な生育地である産地において、人々の間で、地元の紫根が用いられてきたことは岩泉に伝わるわらべ唄にうたわれていることからも十分考えられます。

12 ホームスパンの婦人用スーツ

ホームスパンとは、刈り取ったヒツジの毛を洗ってカードをかけて毛並みを揃え、手で紡いだ太さの均一でない糸を使用し平織や綾織に手織りして手仕上げした素朴な毛織物をいいます。もともと、日本にヒツジはいませんでしたから、日本で牧羊、毛織物製造が始まったのは、明治時代以降、国の施策によるものでした。ホームスパンは国産羊毛を国策として利用するとともに、羊毛の有効活用という農村工業の目的で、全国で製造されていきましたが、岩手のホームスパンが最後まで残ったといわれています。

このホームスパン製作は、自分の工場を作って自立しようとして始められました。戦後、ヒツジが国内に溢れていたころです。地元産の羊毛を洗い、染色し、紡いで織る。コートやスーツにするときは仕立てに出す。ほとんどが、家族用や進物用でした。この婦人用スーツは、父のために作ったブレザーとズボンをリフォームしたもので、ほかにも、何度もリフォームしたり、手を入れた布たちが、今も大切にしまわれています。

13 絹の手紬糸

この糸は宮城県塩釜市に住む60代の方から頂いたものです。母親の荷物の整理をしていて出て来たのですが、とても大事にしていたのでしょう、少しも痛まずに綺麗に保存されていました。1924年(大正13)生まれの母親の実家は、仙台市宮城野区岩切にあり、酒屋と農業をする傍ら、自家用に養蚕をしていたそうです。1946年(昭和21)に嫁ぐときに持ってきたもので、戦後直後の物のなかった時代に絹の糸はどんなにか貴重だったことでしょう。節の少ない綺麗につむがれた糸が着物一着分くらいありました。

丸森の手紬糸の作り方は、結城紬のように一度真綿にしてからつむぐのではなく、繭を煮て柔らかくした繭綿(まゆわた)から、直接手で糸をつむぎ出します。岩手県の花泉でも同様の方法が行われていたので、中間地点である仙台市で作られたこの糸も同様かと思われます。撚りの掛からない、温かみのあるふんわりとした出来上がりで、丁寧で熟練した仕事振りに舌を巻きます。

参考資料・文献

『岩手郡史』 岩手県教育会岩手郡部会編纂 1941
『盛岡市史第五分冊』、『盛岡市史第十二分冊』 盛岡市役所 1951
『染織辞典』 日本織物新聞社編 1951大改定増補版
『岩手県史』第11巻・民俗 岩手県 1965
角山幸洋 『日本染織発達史』 田畑書店 1968
澤田勝郎著 「岩手県製糸業の変遷」『岩手地方史の研究』 法政大学出版局 1969
福田武雄編纂 『滝沢村誌』第４編 滝沢村 1974
佐島直三郎編 『南部むらさき』 南部むらさき染研究会 1981
山崎文子ルーム編・発行 『染むる糸』 1982
森田珪子 『女わざ』1 ～23号 北土舎 1983～2006
『胆沢町史』Ⅷ 民俗編 胆沢町史刊行会 1985
『中屋弘子業績集―岩手の農民服と南部家伝来衣裳―』 1987
伊藤智夫著 『ものと人間の文化史 絹Ⅰ・Ⅱ』 法政大学出版局 1992
森田珪子 「岩手県南地方に伝わる家庭内に於ける女性の伝統的手工芸」『麻生東北短期大学紀要』第18号 1993
森田珪子 「かまばたおりの系譜を想う」 月刊『染織α』 No.204 1998
福田アジオ他５名 『日本民俗大辞典』 吉川弘文館 1999
『山野の植物をたべる・着る・使う』
第30回岩泉町民文化展 民俗資料展示 解説書 岩泉教育委員会 1999
中山康直 『麻ことのはなし―ヒーリングヘンプの詩と真実』 評言社 2001
のぶ・池野・ファリル 「柳宗悦先生のお伴で紫根染をたずねる」
『わたしの日本 わたしのアメリカ』ｐ23～44 暮しの手帖社 2002
赤星栄志 『ヘンプ読本』 麻でエコ生活のススメ 築地書館 2006
高橋貞子 『安家紫根染―もうひとつの紫根染の記録』 熊谷印刷出版部 2007
『丸森と養蚕～養蚕と共に栄えたシルクの町～』 丸森発シルクロード計画推進委員会 2008

布資料にふれて

「食と農」の博物館は、「日本の博物館の父」とも言われている田中芳男が本学前身の東京高等農学校初代校長だった明治37年、標本室を開設したことに始まります。当時の標本室については、詳細な記録はありませんが、動植物類の資料が主で、農具類などの民俗資料も収蔵していたことが残されていた写真資料から読み取れます。

我が国初の理学博士の伊藤圭介に本草学を学び、博物学者シーボルトの影響も受け、物産収集に情熱を注いだ田中芳男は、明治４年、我が国初の博覧会開催や、また明治24年には伊勢神宮に「神苑会農業館」を開設したことでも知られています。実際に博覧会では審査官として木綿や紡績などに関連する資料にも接しており、当時の標本室には、今回の特別展で見るような布資料も収蔵されていたとも考えられます。しかし、開設以来の標本室資料は、70年前の戦火で全て焼失してしまいました。現在ある資料は戦後、世田谷に本学キャンパスが移ってから収集されたものです。

戦後、新たに収集再開した当館の古農機類写真目録（1978年刊行）を調べてみますと、偶然にもそこには全国各地の高機（たかばた）や地機（じばた）、糸車などの道具類とともに麻や木綿、絹といった布類もあることに気付かされます。「それらは田中先生の収集への想いが受け継がれてきたからこそ存在する」と、実際それらの収集に携わってきた当館の前副館長の梅室英夫氏は語ります。資料には戦前の遥か昔から農村の女性たちによって育まれ、使い尽くされてきた布や道具類も見られます。

本展は、当館収蔵のそうした布資料と併せて東北を活動の拠点としてきた「女わざ」のグループに寄せられた布を中心に構成されています。それらの中には、４年前の東日本大震災で倒壊した家屋から救い出された布たちもあって、布と共に命がけで生きてきた農村の女性たちの深い想いが強烈に伝わってきます。

学術情報課程・学芸員コース４年生の作品

グループの代表である森田珪子氏は本冊子の中で紹介しています。「私が居なくなったら焼かれてしまう」「人前には出せないけれど」と言って、戦前、戦中を生き抜いた東北の女性たちから託された布たちであることを。そして当館の布資料もまた、現代農学における研究・教育では活用されることなく、大学では忘れられた存在です。しかし、それらの布たちが現代に託された資料である以上、この展示を機会に未来へと伝え語り継ぎ、博物館の役割を果たさなければならないと考えます。

黒澤　弥悦（学術情報課程教授）

「女わざと自然とのかかわり」
―農を支えた東北の布たち―

期　　間：2015年10月14日（水）～2016年３月13日（日）
場　　所：東京農業大学「食と農」の博物館　１階 企画展示室Ａ・Ｂ
Food and Agriculture Museum, Tokyo University of Agriculture
www.nodai.ac.jp/syokutonou
開館時間：10：00～17：00（12月～３月は16時半まで：入館は閉館時間の30分前まで）
休 館 日：月曜日（月曜日が休日の場合は火曜日）、毎月最終火曜日、大学が定めた休日
入 場 料：無料
イベント：①　対談　10月17日（土）　13：30～15：30
・テーマ／「受け継がれるわざ、受け継ぐこころ」
・対談者／多田米子（染織研究家・TEORIYA主宰）
森田珪子（修紅短期大学名誉教授）
詩の朗読：柴川康子
・会　場／１階映像コーナー
②　ワークショップ
＜１回目＞11月７日（土）　13：30～15：30
・テーマ／「麻績みと絹の座繰」・実演と話
・講　師／上野節子（雫石麻の会代表）
吉田信子（結工房主宰）
・会　場／２階セミナー室
＜２回目＞11月28日（土）　13：30～15：30
・テーマ／「バイアスの不思議」
・講　師／森田珪子（修紅短期大学名誉教授）
・会　場／２階セミナー室

主催：東京農業大学「食と農」の博物館　代表：上原万里子
企画：特別展示実行委員会
委員長　大林宏也
委　員　黒澤弥悦、木村李花子、安田清孝、西嶋　優、大石康代、中垣千尋
指導・監修
森田珪子（修紅短期大学名誉教授）　中屋洋子（元岩手大学非常勤講師）　吉田信子（結工房主宰）
協力機関：天台宗別格本山毛越寺、天台宗妙見山黒石寺、岩泉町、奥州市、奥州市牛の博物館、宮古市北上山地民俗資料館、川西大念仏剣舞保存会、川嶋印刷株式会社、東京農業大学学術情報課程 及び 学術情報課程の履修学生
協力者：佐藤弓、中嶋美芳、水田久美子、二部洋子、菊池信子、森川武吉、栗原洋一、佐藤和子、八重樫惠子、佐々木復子
工藤厚子、高橋貞子、佐々木陽、大崎正敏、飯塚泉（順不同）

展示・催事のお知らせ

■特別展示
「女わざと自然とのかかわり」―農を支えた東北の布たち―
【期間】　平成27年10月14日（水）～平成28年３月13日（日）

■常設展示
【１階展示室】東京農業大学の紹介展示（２人の学祖、建学以来の歴史等）、トラクター、鈴木梅太郎のオリザニン、二母性マウス「かぐやKAGUYA」、材鑑標本、進化生物学研究所コレクション　他
【２階展示室】古民家の再現ジオラマと古農具コレクション、ニワトリの学術標本コレクション、住江金之コレクション（色々な酒器及び酒に関する風俗資料）、農大卒業生の蔵元紹介

PRINTED WITH SOYINK
2015.10.06.5,000